

イタリアにおけるクラシックコンサートに参集した 聴衆の満足度水準に関する研究

好 満 あ き 子

Study on the Level of Satisfaction of Audiences at the Classic Concert in Italy

Akiko Yoshimitsu

The aim of this issue is to investigate the level of satisfaction to the contents of classic concert from audience's music experience at my invited piano concert place in Italy. Presently, a variety of concert style is servicing for audience, such as classic concert with talking, with subtitle, or concert of famous piece of music and those concerts open the road of the door into funny classic music. However, I think how these audiences feel to those streams. From the results of this questionnaire, those audiences do not expect the additional performance in order to improved the usual classic concert to make active live. Additionally, most important interest of contents for classic concert is different among beginner, general people, and persons having deep linkage to music.

As the results, classic music concert must be planned to be satisfied by audience having various music experience, respectively.

キーワード

聴衆の満足度 satisfaction of the audience, コンサート内容 contents of classic concert
鑑賞経験 music experience, コンサートへの期待 expectation for classic music concert
満足度調査 investigation of the level of satisfaction

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University
学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 音楽学科 Department of Music

1. はじめに

クラシック音楽のコンサートは多く開催されているが、来場者の感想等、実際の統計はあまり取られていない。クラシックコンサートへ継続的に足を運ぶ人は増えてきているのだろうか。クラシック音楽の裾野は広がっているのだろうか、疑問である。コンサート後の反応や感想を聞いていると、ベートーヴェンやショパンの曲が聞きたかった。知っている曲を弾いてほしい。あいさつやトークを入れてほしい、との声が多く聞かれ、実際、近年では、トーク付きのコンサートは年々増えてきている。こうした

工夫でクラシックファンが増えれば喜ばしいことである。しかし、実際多くの方がこうした事を本当に望んでいるのだろうか。そして、聴衆と演奏家双方が成長していけるのか。私はピアノ演奏家として、コンサートに聴きにきてくださった方々が一体、何を望むのか、何を重要として、どうしたら満足するのを知りたい、と常々考えていた。過去のクラシックコンサートに関連する文献を調べてみたが、クラシックコンサートに来る人達はこういった種類の人達か¹⁾、何を意図してコンサートに来るのか²⁾を研究した文献はある。しかし、コンサートの中で、こういった人達が何に満足するのかを研究

したものは見つからなかった。そのような中、2010年12月にイタリアの音楽事務所より招待され、ピアノリサイタルを開催する機会をいただき、その際に聴衆にアンケート調査を行うことができた。日本と文化が違うイタリアの聴衆は、クラシックコンサートに対し、どのように考えているのだろうか。観客にとっての優先順位は何だろう。どのような経験を積んだ人が何にコンサートの価値を見ているのか。それを調査し、観客が満足度を高められるコンサートを企画することは、これからのクラシック音楽の発展のために有益であると考えた。

また、一回生のコンサートには様々な観客が来場する。長年コンサートに通いつけている常連から、たまたま来てみた一見の観客まで、実に大変多くの種類の経験を持つ人々が集まる。そのため、その人のそれまでの音楽経験によって、それぞれの観客のコンサートに対する期待水準が異なってくるのではないかと仮定する。個人の価値観はその人の考え、感覚に影響を与えるため、コンサートで何を感じるか、どう満足するかは過去の体験から判断される。そこで、観客の音楽鑑賞歴、楽器学習歴、音楽環境を調査したうえで、クラシックコンサートで感じる事、コンサートの内容で何を重視しているかを調査した。

初めてクラシックコンサートに足を運んだ時の状況を尋ねると、「両親がすごく好き、クリスチャンだから小さいころから教会コンサートに行っていた。」「楽器を習っていた先生からの案内で行ってみた。」「通っていた楽器店からの案内で行った。」「父親の趣味がオルガンでコンサートにはよく一緒にいった。」などと、コンサートに行き始めるきっかけは周りの環境が影響してくると思われる。自身が楽器を習っている、又は家族が楽器演奏をする、など身近な人達、音楽通の仲間がいると自然とコンサートへ出かける。環境がその人の行動、価値観を変えることは多いだろう。音楽経験でコンサートを体験するということは大変大きな意味を持ち、一度経験するとそこが出発点となり、コンサートへ通うようになるため、環境がきっかけを与えてくれるという意味で大きな影響力がある。また、はじめてコンサートへ行く際、「一人だと不安。」行ってみて、「何か自分は場違いなのではないだろうか。」「理解できるだろうか。」と不安がつり、期待より悪い予想が上回り、行くきっかけを自分自身で潰してしまう。しか

し、家族からの誘いや、友人と一緒に行くのであれば、その不安の大半は解消され安心する。更には、友人と共同で楽しむイベントとしての価値が生まれ、コンサートへ行くという意思決定ができる。このように両親、友人など身近な人が音楽の情報を持っていれば行く機会に恵まれるのではないだろうか。そこで、音楽学習歴、身近に楽器演奏のできる人の有無などの環境によって、その人のクラシックコンサートに対する構えに差が生じてくるのではないかと推測する。

2. 調査方法

前章で示したように、クラシックコンサート来場者の満足度を図るため、顧客のコンサート経験度や音楽学習歴、音楽環境を種別し、その上でどのような内容に満足度を高めるかを調査するため、以下のような概要でアンケート調査を実施した。

調査対象：ピアノリサイタル来場者

調査時期：2010年12月

調査場所：イタリア、カラタビアーノ市

調査方法は、リサイタル開始直前に直接配布し、リサイタル終了後回収、150枚配布し127枚回収で回収率は84.7%であった。調査の内容は、以下の内容で行った。

- ・音楽を聴く頻度
- ・楽器学習歴
- ・音楽環境
- ・クラシックコンサートでの雰囲気
- ・コンサートでの内容に関する満足度

3. 調査対象者の概要

(1) 調査対象者の属性

表1に回答者の属性一覧を示す。コンサート来場者は、20～50代の世代が占めた。1番多い世代が20代であったことに驚く。非常に若い世代がクラシックコンサートに多く出向いていることにクラシック音楽の未来を感じる。世代間で受け継がれているのだろうか。日本の若い世代がクラシックコンサートに行きにくい状況から考えると、うらやましい限りである。

また、コンサートを知った方法について、知人・友人からが一番多かったが、2番目はホームページからであった。これも、若い世代が多いからこそその結果だろう。このようにサイトを

通じての音楽情報発信からの影響も見られ、若い世代に情報が見やすくなっている事も参集で

表1 有効回答者の属性構成 (単位：人)

		性 別		
		男性	女性	合計
年 齢	10代	1	5	6
	20代	10	15	25
	30代	7	14	21
	40代	5	14	19
	50代	9	15	24
	60代以上	7	8	15

表2 年齢別にみたクラシックコンサートへ行く頻度 (単位：人)

		年間の鑑賞頻度								
		0回	1回	2回	3回	4回以上	6回以上	11回以上	21回以上	合計
年 齢	10代	2	2	1	1	0	0	0	0	6
	20代	11	6	4	3	0	1	0	0	25
	30代	2	8	6	1	2	1	1	0	21
	40代	1	5	2	1	3	5	2	0	19
	50代	4	7	4	2	3	3	1	0	24
	60代以上	0	3	4	1	0	2	2	3	15

表3 年齢別にみたクラシックコンサートの鑑賞期間 (単位：人)

		何年前から聴きにきているか										
		0年	1年	2年	3年	4年	5年	6年以上	11年以上	21年以上	31年以上	合計
年 齢	10代	3	1	0	0	1	0	1	0	0	0	6
	20代	11	3	2	3	1	3	1	1	0	0	25
	30代	3	1	2	1	1	4	2	5	2	0	21
	40代	2	0	4	1	2	1	1	4	2	2	19
	50代	5	1	2	3	0	1	2	1	6	3	24
	60代以上	2	0	2	0	0	0	3	0	1	7	15

(2) 音楽的履歴

① 音楽を聴く頻度

聴衆の音楽鑑賞頻度を調査するため、「クラシックコンサートへ行く頻度」、「いつから行っているか(期間)」、コンサート以外の音楽を聴く頻度として「CD等でクラシック音楽を聴く時間」、この3つを尋ねた。表2にコンサートへ行く頻度の結果を示す。年に0回と答えたのは全体の20.5%にあたり、残りは年に一回以上コンサートに来ている人達になる。日本では高

齢層に頻度の高い場合が多いが¹⁾、今回のイタリアでの調査では、高頻度の層には、30代、40代の若・中年世代もおり、若い世代でも頻度の高い人が多いことが示された。

鑑賞期間に関しては、聴きにcomingようになったのは、表3に示すように、1年から5年前が多くみられる。また、20、30年前から聴きにきている長期間の層には、10、20代から聴きにきている人が多い。その人達の中には、教員、学者、弁護士、医者、実業家など、高い地位の職業が

多く見られ、これに専門家の音楽家加わる。

続いて、CDでの聴取時間では、週に2時間以下が多数であった。

② 楽器学習歴

次に楽器学習歴を調査した結果を表4に示す。学習歴を持つものの方が少なかった。未経験者は全体の61%にのぼる。全く楽器を習っていない人達が、これだけたくさんコンサートへ聴きにきている結果に、クラシック音楽を「する」ことはしていなくても、「聴く」ことができる人達が多いということは、環境が優れているのではないかと推測する。経験者の中では、子供の頃に習った者が設問全体の32.5%で一番多いが、その学習歴は5年以下が25人、6年以上が10人と5年以下の短期間での学習が多い。

表4 楽器歴

質問項目	%
全く習っていない	61.0
子供の時習った	32.5
今習っている	4.9
専門的に習っている	1.6

③ 音楽環境

表5に身近な人が楽器演奏をしているかを尋ねた結果を示す。知り合い、家族が楽器演奏をする、と答えた者が多かった。「全くいない」と答えた18%の人達を除いて、周りに誰かが楽器演奏をしており、音楽的環境度は高いと思われる。

表5 音楽環境の度合い

質問項目	%
全くいない	18.0
子供時代、両親が演奏していた	7.2
家族	35.3
知り合い	39.5

①②③を比較すると、楽器を全く習ったことがない人が75人(61%)と高く、楽器学習経験がないにもかかわらず、コンサート鑑賞する人が多くいるという事に驚く。知り合いや家族が楽器演奏をする割合が多いことから、本人は楽器演奏をしないが、周りの音楽環境が良いため、

コンサートに通う習慣になるのだろうと推測する。その根拠に、知人、友人を介して当演奏会を知った人が一番多かった。

4. クラシックコンサートの雰囲気

(1) 結果の概要

顧客の音楽的履歴が分かったところで、顧客の音楽経験度によって、クラシックコンサートの雰囲気をどのように感じるのかを比較調査した。表6に示すように、選択肢には以下の8つを設定した。

表6 コンサートの雰囲気

質問項目	%
退屈	4.0
堅苦しい	4.7
閉鎖的	0.0
敷居が高い	10.0
教養の場	22.0
心地良い	34.7
楽しい	9.3
その他(自由記述)	15.3

この中で、最も多かったのは「心地良い」、次いで「教養の場」、3番目に「その他(自由記述)」という結果であった。この3つは好感の持てる雰囲気の方に当てはまるプラスイメージであろう。「その他」がプラスイメージに入る理由に、その他を選んだ者のほとんどの自由記述が、コンサートで感じる情感を豊かな語彙で記されているためである。好感の持てない雰囲気を思わせる「退屈」「堅苦しい」「閉鎖的」「敷居が高い」の4つはマイナスイメージの分類に入るが、こちらを選択した者は、18.7%と低い値であった。クラシックコンサートを敬遠させる原因の一つに、コンサートに対し独特の雰囲気のイメージがあり、閉鎖性、疎外感があると一般的には捉えられているのではないかと考えていた。しかし、調査した結果、「閉鎖的」を選択した者がいない事と、マイナスイメージを選択する者が少なかったことから、予測とは違い、クラシックコンサートでの雰囲気を気に入っている人達が多い事が分かった。また、この事は好感を持てるが、積極的に来ることとは別だと考えられていると思われる。

「退屈」を選択した人は、コンサートに行く頻度が0回で鑑賞期間も0年の一見の客でほぼ占められており、楽器を全く習ってない人、CDを聴く時間も0分という、音楽鑑賞頻度、鑑賞期間、楽器経験、全てにおいて非常に低い層である。また、「堅苦しい」を選んだ人は、コンサートに行く頻度が低く、鑑賞期間は5年以下の短期間が多い。CDを聴く時間も少ない人が多いが、音楽環境は良い層に見られる。さらに、「敷居が高い」と感じる人は、鑑賞頻度は0回の者が特に多いが、常連の者まで様々おり、CDを聴く時間が短い人が多い。全く楽器を習っていない者が半数をかなり超えるが、周りに楽器演奏ができる人がいる割合が多く、環境は良い。これは、クラシックコンサートに敷居が高くてもわざわざ来る人達で、高い所に行く事を好む、という場合と、敷居が高いから来ない人に分かれるだろう。2番目に高い値の「教養の場」を選択した人は、一見から常連まで幅広く見られるが、コンサートに長い期間足を運んでいる人の方がやや多い。これは、行くことによる社会的教養という位置づけと、演奏から背後にある様々な事を学びとる面があるからではないか。最も値の高かった「心地良い」は鑑賞期間の短い層から長い層までいる。全く楽器を習っていない者が半数を大きく超える。また、「楽しい」を選んだ人は、コンサートに行く頻度はやや低く、鑑賞期間はやや長い層が多い。年齢層が若く、10から30代が多い。音楽鑑賞頻度が低く、期間はやや長期間が多い。3番目に高い値であった「その他」を選択した人は、コンサートに行く頻度が多く、しかも長期間行っている人が多く、その上、CDを聴く時間もかなり長い。そのため、常連層が多く選択しているといえる。家族、知り合いが楽器演奏をする者が多い。楽器歴のある人は多くないが、鑑賞経験が豊富で、音楽環境に恵まれている人が多い。自由記述では、豊富な表現で自分の感覚を記載できる観賞力の高い人達が選択していると言えるだろう。

(2) マイナスイメージとプラスイメージ

更に分析を進めるため、この8つの選択肢を大きく2つに分けて考察してみる。

- ・「退屈」「堅苦しい」「閉鎖的」「敷居が高い」
…マイナスイメージ
- ・「教養の場」「心地良い」「楽しい」「その他（自

由記述)」…プラスイメージ

このように2分類にして分けて考察を進めてみる。表7に鑑賞頻度・期間別の調査結果を示す。音楽鑑賞頻度の高い層と鑑賞期間の長い層は、ほとんどがプラスイメージのみを選択しており、「心地良い」と「その他」が特に多かった。反対に鑑賞頻度が低く、鑑賞期間の短い層は、答えがばらつき、「敷居が高い」「心地良い」が特に多かった。頻度の高い層も低い層も「心地良い」を選択した者が特に多かった点が注目されるが、鑑賞経験度の低い層に「心地良い」が多いという結果は、どういうことだろうか。クラシック音楽を聴く経験が少ないと、コンサートで耳に入ってくる演奏をあまり繊細に分析しながら聴くことは難しいと思われる。まだ耳が慣れていないため、細かな音のイメージまで受け取ることができない。そのため、全体を流れるように聴く状態になり、知識ではなく心で感じる。音の流れ、運びの美しさに対して心地良くなるのだろう、と推測する。

特に記載すべきは、長期間の層にプラスイメージの中の「その他（自由記述）」を選択したものが非常に多い点である。これは、クラシックコンサートを長期間行っている人達は、経験が長い分、音楽を受け取る土台が備わっており、演奏を受けとめた時の心に感じる状態というのがより繊細で深いものがあり、選択肢として与えられた言葉以外に、多彩な表現方法で記載することができるためであると推測する。

マイナスイメージを選んだ者は、鑑賞経験の低い層の人達が多く、プラスイメージを選んだ者は、鑑賞経験の高い層の人達が多い。低い層がマイナスイメージを選択する理由としては、経験が浅いため、コンサート会場にまだ慣れていない。それによる居心地の悪さから堅苦しい、敷居が高いなど感じるのだろう。演奏をあまり聴いたことがない人にとっては、まだクラシック音楽を理解できる耳が養われていないため、音楽の理解力がまだ不十分のまま演奏を聴くため、分かりにくく退屈だと感じてしまうものと推測される。

反対に鑑賞期間が長い層は、それまでの鑑賞経験から、音楽を理解できる耳が育成されており、音から様々なものを読み取る力がある。経験するほどに、多くのものを得られるようになり、更に知識を深めるため、教養の場を選択している。また、耳から入ってくる音楽を理解で

きるため、それを心地良いと感じるのだろう。

表7 鑑賞頻度・期間からみたコンサートの雰囲気
(単位：%)

	鑑賞頻度が 年間4回以上、 期間は5年以上	鑑賞頻度が 年間1回以下、 期間は5年未満
退屈	0.0	10.0
堅苦しい	0.0	8.0
閉鎖的	0.0	0.0
敷居が高い	6.6	18.0
教養の場	16.7	14.0
心地良い	36.7	32.0
楽しい	10.0	12.0
その他 (自由記述)	30.0	6.0

(3) 聴き語ること

鑑賞経験の多い層が「その他」の自由記述欄に様々な表現で記述しているが、感情や精神状態の繊細なところまで感じ取っていることが分かる。一例をあげてみると、piacevole 愉快的な、心地良い、快適な、rilassante ゆるめられた、緊張がとれた、くつろいだ、emozionante 興奮する、夢中になる、maestrosita 荘厳さ、possibilita 可能性、comunita 共同体、armonioso 調和の良さ、響きの良さ、耳に快い、e appagante 満足感、耳を楽しませる、心を落ち着かせる、cibo per l'anima 魂、心の糧、catartico カタルシス(浄化)、malinconico 憂鬱な、物寂しい、serenita 平穏、落ち着き、stupore (強い) 驚き、驚愕、茫然、brivido 震え、おののき、身震い。

この感じとったものを適切な言葉で表せる能力が素晴らしいと思う。聴いたことを語れるということは鑑賞力の高さを表す。この鑑賞経験の多い層は鑑賞力の高い層だともいうことができるだろう。「日本の美術や音楽が「する」教育に重点をおき、鑑賞を軽視してきた。音楽における鑑賞は聴くこと。聴いたことを表現するには言葉がいる、語彙が豊富でなければならない。」日本では楽器演奏をする者は多いが、音楽を鑑賞し、それを言葉で表現できる者は少ない²⁾。その要因の一つに、文化として子供の頃からコンサートに行くという習慣もなく、生の音、本物の音に慣れていないことが挙げられるだろう。ある程度、時間的、精神的なものに余裕がなければ行かないだろう。美術などの文化に同じものを感じる。イタリアのこの鑑賞経験

の多い層のように、豊富な語彙で演奏から自分が感じ取ったものを適切に表現できると、一層音楽の楽しみを深めていくことができるだろう。語る事ができるとは、それに対して考えを持つということにつながる。クラシック音楽は聴いたものを受け取り、感じ、それについて考え、想像を膨らませていくことで、更なる楽しみ、深みを知ることができる。ただ単に聴くだけでは、心地良いだけで終わってしまうだろう。鑑賞力を高めていけば、クラシックコンサートを楽しめるようになるということが言えるだろう。それはただ聴くだけ、長い期間という問題ではなく、興味がわくポイントがあり、それを自分のものとした時に高まるものである。ヨーロッパ文化の中に、やはり音楽を聴くというのが、生活の一部となっている事が大きな要因でもある。

5. コンサートでの内容に関する満足度

コンサートでどのような内容に満足するのかを調査するため、以下の4問の設問を設定した。

- ① プログラムが様々な時代、様式の曲目で組み立てられている
- ② 曲目が、あるテーマに沿ったものであること(例：ドイツロマン期のプログラム、「水」に関連する作品で組み合わせている、など)
- ③ プログラムに名曲や馴染みの曲がある
- ④ 曲の解説などのお話があること。

以上の4問全ての設問はリッカートスケールの5段階尺度で行った。結果を図1、表8、及び表9に示す。このうち、「どちらでもない」を選んだ者は1名又は2名で、頻度、楽器歴、環境面、全てにおいて0または無回答が多く、記載するに値しないため、省かせていただく。そのため、ここでは「重要でない」「あまり重要でない」「やや重要」「重要」を選択した人に関してのみ述べることにする。

- ① プログラムが様々な時代、様式の曲目で組み立てられている

この設問は、クラシックコンサートの古風な形式のプログラムの組み方である、様々な時代、作品の形式をヴァリエーション豊かに組み合わせているコンサートに関して、どのように考え

られているか問うために設定した。

重要だと答えた割合が61.2%で、鑑賞頻度の多い層、少ない層ともに、重要だと答えた者が多く、どちらの層にも重要視されていることが分かる。

② 曲目が、あるテーマに沿ったものであること (例：ドイツロマン期のプログラム、「水」に関連する作品で組み合わせている、など)

最近、副題をつけたコンサートがよく見られる。私自身もリサイタル開催の時に、依頼側から「副題をつけるとお客さんが集まりやすいから付けて欲しい」と言われたことがある。テーマを付ける事で、知らない曲目が並べられたプログラムがある一つの言葉に統一され、コンサート自体が人々に分かりやすい印象を与え、入口を広く設定できるため、と考えている。②は、この日本の最近の流行りのコンサート形式をどのように考えるかを問うために設定した。

重要だと答えた人の割合は60.2%であったが、鑑賞頻度の低い層は重要だと答えた者が66.7%、鑑賞頻度の多い層は重要でない方が

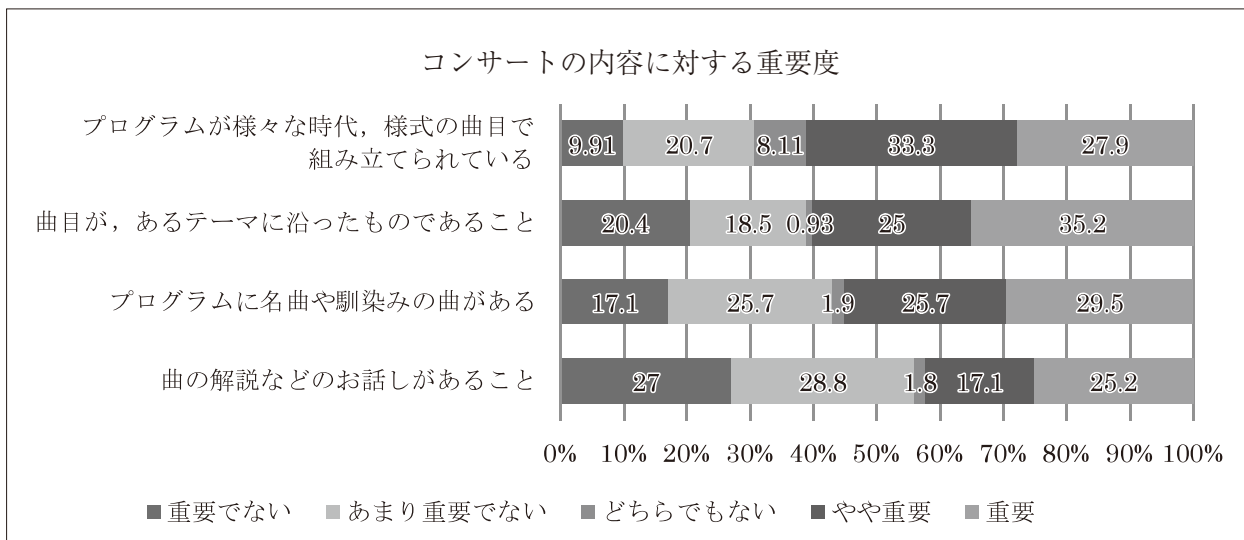
60%と異なる結果がでた。これは、サブタイトルが付いたコンサートが、一般受けする分かりやすい演奏会のイメージがあるからだと推測する。

③ プログラムに名曲や馴染みの曲がある

「名曲、知っている曲を入れてほしい」これは以前から一番、聴衆からの希望で言われることである。しかし、聴衆全員からの意見を聞いたわけではないので、どの層の人達もこれを望んでいるのかを問うために設定した。

重要だと答えた割合は55.2%であり、鑑賞頻度の少ない層は、重要だと答えた方の割合が高かったが、鑑賞頻度の多い層は、若干重要でない方の値が高かった。音楽経験の少ない人にとって、馴染みの曲がある事は受け入れやすいため、もっと重要性があるものだと推測していた項目だが、重要だと答えた割合は57.1%とそこまで多くなかった。4問のうち、この③の問いに一番ばらつきが見られ、多くの人が、名曲コンサートを望んでいるわけではない、という事が分かった。

図1



④ 曲の解説などのお話があること

「コンサートの中でお話しをしてほしい」と言われることが近頃多くなっている。それもそのはずで、近年はトーク付きのコンサートが非常に多くなってきている。現在、日本で最も求められているスタイルのコンサートと言ってもよいだろう。コンサート会場で、今から聴く作

品の解説を聞き、その作品への扉を開けたところで、実際に生の演奏で聴くことができるため、音楽経験が少なく、まだ知識に蓄えのない人達にクラシック音楽を理解してもらうためにとても良い体験だと思う。しかし、どの層の人達にも受け入れられるものなのかどうかは分からない。イタリアの聴衆はどう考えるだろうか気がになり調査した。

重要だと答えた人は42.3%、重要でないと答えた人は56.8%と、この④の問いのみ、重要でない方の割合が高かった。そして、重要でないを選んだ人は、長くコンサートに通っている人が多い。鑑賞頻度の多い人は、曲の解説などのお話があることに対して、重要でないが69.2%、重要だと答えた人が30.8%と大きな差異が見られる。鑑賞頻度の低い層は、若干重要でないと答えた方が多かった。

コンサートの内容に対する満足度調査項目4問全ての結果から、④のみ重要でないを選択した人の割合が多く、それ以外の①②③は重要だと答えた人が多かった。④に関しては、一見も常連も重要視していなく、入りやすいコンサ-

トとして、一見からは、もっと高い値が出てくると推測していた。意外にも、日本では、最近トーク付きのコンサートが流行っているが、イタリアでは、コンサートにトークがつくことは重要視されていないようだ。

以上がコンサートでどのような内容に満足するのかを調査した結果である。この4問は推測していたよりも、結果にばらつきがある。演奏家の私から考えると、企画する際に、プログラム内容について悩むのだが、聴く人達は、音楽経験を超えて、様々な思いを持って聴いていることが分かり、大変参考になった。

表8 鑑賞頻度が年に5回以上の人のコンサート内容に対する重要度

(単位：%)

質 問 項 目	重要でない	重 要
プログラムが様々な時代、様式の曲目で組み立てられている	37.5	62.5
曲目が、あるテーマに沿ったものであること	60.0	40.0
プログラムに名曲や馴染みの曲がある	58.0	48.0
曲の解説などのお話があること	69.2	30.8

表9 鑑賞頻度が年に1回以下の人のコンサート内容に対する重要度

(単位：%)

質 問 項 目	重要でない	重 要
プログラムが様々な時代、様式の曲目で組み立てられている	25.6	74.4
曲目が、あるテーマに沿ったものであること	33.3	66.7
プログラムに名曲や馴染みの曲がある	42.9	57.1
曲の解説などのお話があること	52.9	47.1

6. まとめ

イタリアの聴衆は、日本の聴衆とどのような違いがあるのだろうか。調査結果から明らかになった点は、若い世代が多い事、コンサート内容に関しては、トーク付きを重要視していなく、名曲を聴きたいと強く思わない、また、鑑賞経験の多い層に関しては、鑑賞力がある事。そして、楽器経験がなくても、コンサート鑑賞頻度は高く、その要因として、知人、友人、家族など、まわりに楽器演奏ができる人がいる割合が多く、音楽環境が良いことが挙げられる。

(1) 日本とイタリアの生活時間の差からくる影響

日本ではクラシックコンサート参加者は高年齢層の占める割合が高い傾向が見られる¹⁾、なかなか若い世代には行きにくいジャンルだと捉

えていた。今回の調査結果では、20~50代が多く、中でも一番若い20代の人数が最も多かった。日本では様々な要因が挙げられるが、一例をあげると、時間の問題があり、働き盛りの世代の若者は仕事が多忙で帰宅時間が非常に遅く、それからコンサート会場への移動を考えると、平日の夜のコンサートへ行くこと自体が不可能な場合が多い。イタリアでは休日を大事にすると言われているが、仕事と休日をはっきり分けており、平日でも夕方7時以降は仕事の空気は一切取り払われ、家族と共に余暇を十分に取る文化がある。現地で生活してみれば分かると思うが、動く時間帯と休む時間の静の時間帯の分け目から、空気感が全く変わり、仕事上から発生する騒音というものが全く無くなる。個人の休日を大事にする、そのような生活環境も影響してくるのだろう。

(2) 常連層の聴衆の特徴

常連のコンサートの雰囲気を感じ方とコンサート内容の何を重要と考えるかをまとめてみると、コンサートの雰囲気に関してはプラスイメージがほとんどで、最も多いのは「心地良い」で、ついで、「その他」が多かった。その他の自由記述欄には多彩な表現で書かれていたが、全体の中で記述をしているのは16名。そのうち9名がこの常連層にあたり、音楽の楽しみ方を知っている層といえるだろう。

コンサート内容に関しては、①プログラムが様々な時代、様式の曲目で組み立てられている事が重要と答えた割合が多く、②曲目が、あるテーマに沿ったものであること、及び④曲の解説などのお話があること、に関しては重要でないと答えた割合が多かった。③プログラムに名曲や馴染みの曲がある、に関してはばらついた。常連層の結果からいえることは、理解できる人は、どんな構成でも自分なりの理解、自分の感想を具体的に説明できるため、テーマや名曲、解説などは必要ないのだろう。

(3) コンサート経験の少ない層の特徴

常連に比べ、マイナスイメージの「退屈」「堅苦しい」「敷居が高い」を選択したものが多い。プラスイメージで常連と違うものは、「その他」が少なく、自由記述欄に記入した者が1名のみという点である。コンサート経験が少ないと、蓄えている音楽知識が十分に備わっていないために、コンサートを楽しめられないので、退屈だと感じ、居心地が悪くなるのだろう。そして、なかなか理解できないため、敷居の高さを感じるのだろうと思われる。そのため、テーマの付いたコンサートや名曲プログラムのコンサートが分かりやすく、満足度を高めるのだろう。とはいえ、例えば、日本人の私のコンサートにも興味を示して参加する前向きかつ好奇心あふれる若者らしさには感じさせられた。日本の若者にも学んで欲しいと思う。

7. 最後に

“作曲家が曲を書き、演奏家がそれを解説し聴衆に対し音で描く、それを聴き聴衆が自分の心に描く”—芸術コンサートの理想とはこうである。コンサートの雰囲気の自由記述欄にあったが、“共同体”を感じさせるコンサート、作曲家と演奏家と聴衆が共同体となって生きた芸術をその時間に創造していくことが音楽をするということではないだろうか。

聴衆は、「あっ、この演奏会は自分向けのものだ」と思うと満足すると思う。その「自分向けだ」と判断する価値観は、その人の過去の経験、環境から発生するものだと思う。今回の調査で明らかになったが、鑑賞経験の多い者と少ない者の間では、コンサートの内容に対する重視するものに、差異があることが見えた。重視するものから、その人が満足するだろう演奏会が見えてくる。これからコンサートを企画する際は、一体、今回はどういう層の人達を主たる対象にするのかを決め、その層の人達が満足するだろうと思われる内容のコンサートを作っていくことが、聴衆の満足度を高めるコンサートにするために重要だと思われる。

今回、クラシックの本場であるイタリアで調査し、以上のような結果を得た。今後も、演奏家と聴衆が共に満足するコンサートを企画するための研究を続けていきたい。この調査を行ったピアノリサイタルを開催するにあたって、招致していただき、調査を承知して下さった Onofrio Claudio Gallina 氏に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 西島央「誰がクラシックコンサートに行くのか：東京・新潟・鹿児島のコナート会場におけるアンケート調査をもとに」東京大学大学院教育学研究科紀要43, 2004, pp. 57-76.
- 2) 安田和紘「聴衆の音楽経験とコンサートへの参加意図形成」目白大学経営学研究 8, 2010, pp. 33-50.